

浪江の こころ通信



・第23号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

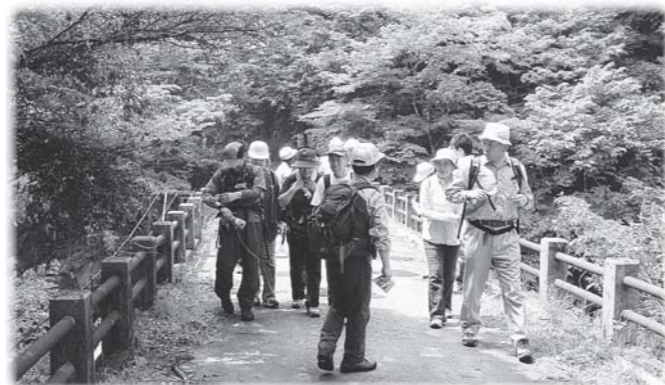
こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第23号」への
感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218



学校だより vol.8

「いつまでも仲間」浪江東中再会の集い



昨年、11月24日(土)二本松市安達公民館で浪江東中学校の「再会の集い」を開催し、互いの友情を確かめました。

震災当時の生徒数は178人（1年55人、2年57人、3年66人）おり、集いには県内外から当時の生徒56名（現在高校1年から3年）に加え、震災時に校長だった浅野一先生他教員12人、保護者23人が集まりました。

震災発生日は、卒業式でした。卒業生の中には卒業証書や卒業アルバム、卒業文集等を流された生徒もいました。

そんな中、半谷写真館を通し、仙台市の斉藤コロタイプ、本宮市の本田印刷所からアルバム・卒業証書・文集を無償で提供していただき、当時の浅野校長から代表の酒井愛さん

へ証書が授与されました。

集いでは、震災前の合唱祭の映像鑑賞のほか、校歌斉唱などを通し懇親を深めました。最後に参加者を代表し島大介君が「先は見通せないが将来に進まなくてはいけない。目標は違っても私たちはいつまでも仲間」と述べました。

このほか、学期に1回「学校だより」を発行しています。浪江東中の生徒は、区域外就学しているそれぞれの学校で学業はもちろん、部活動でも中心的な役割を果たし、県大会等でも大いに活躍しています。学校は残念ながら再開はしていませんが、今後ともご支援・ご協力をお願いします。なお、情報等あれば浪江町小中学校事務局までご連絡ください。

浪江町小中学校事務局内 浪江東中学校 TEL 024-567-6770



高橋昭太郎さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：4月3日

町の皆さんの「かけはし」に

権現堂で昭和37年から、すっぽん料理店「丸福」を営んでいた高橋さん。現在、山形県米沢市で暮らしています。昨年7月、メトロ（食品卸売会社）からケータリングカーの寄贈を受け「キッチンなみえ丸福」として営業を再開し、なみえ焼そばの販売を通して町民の皆さんに懐かしい味と笑顔を届けています。



▲皆さんの所にもなみえ焼そばを販売にいきます。皆さんに会える日を楽しみにしています！

地震の後、「津波が来る」という無線を聞き、家族5人で近くの役場2階に避難しました。次の日「西のほうに逃げろ」ということを聞き、朝避難しました。津島で1晩過しましたが、母が当時93歳という高齢で体育館には長く置いておけないと思い、息子の自宅がある福島市に向かいました。息子の家に避難した人数は、親戚合わせ15名にもなりました。その後親戚を頼りに山形県米沢市に移動し、製材所を営む知人の佐藤さんのア

パートを紹介してもらい暮らしをしています。避難した当時、すぐにこの場所を提供してくださった佐藤さんには大変感謝しています。母は去年2月体調を崩したこともあり、妻と母2人飯坂町の借り上げ住宅でリハビリに行きながら元気に暮らしています。米沢から約30分の場所なので、私も行ったり来たりしています。昨年、福島県飲食業生活衛生同業組合に寄贈いただいたケータリングカー3台のうち一台をお借りし、7月から営業を再開しました。郡山市や会津若松市などの仮設住宅、山形県内のイベントなどでなみえ焼そばを移動販売しています。米沢市の観光物産協会の方に、山形県内のイベントをつないでいただき、今年は物産協会会員になり恩返しも、と考えています。事業再開について息子からは「お父さんの仕事は定年がない。神様がこの地震で定年だって辞令よこしたと思っ、後はゆっくりしてもいいんじゃないか」とも言われたのですが、自分が事業を再開し、働くことによ

と、ふり返っています。浪江では、みんなで力を合わせてまちづくりをする雰囲気もありました。商工会の原田さんとのつながりで、漁師の家5軒ほどが津島小学校の5・6年生を受け入れる民泊の体験事業などもちょうど始まった頃でした。これから盛り上がるというときに震災が来てしまったわけです。あの頃のような暮らしやまちづくりができないことが残念です。役場の方でも町の復興に向けた取り組みを進めているようですが、やっぱり自分たちのこれからは自分で決めていく必要があると思います。役場の動きを待っているのではなく、どこかで踏ん切りをつけることが大切だと思います。震災後、私たちが多くの方に助けられてここまで来ることができました。その御恩に報いるためにも、しっかり家族で力を合わせて生きていくつもりです。



舩倉 豊さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：4月7日

「待っているのではなく、自分たちのこれからは自分で決めることが大切だと思う」 — 1人ひとりの生活再建に求められることとして —

舩倉さんご夫妻は、おばあさんや娘さんたちと埼玉県川越市で生活しています。親戚縁者の支援もあり、震災直後の3月末には総合卸売市場に勤め始め、すでに2年以上が経過しました。お話しは、豊さん、妻の京子さんからお聞きしました。



▲左から豊さん、京子さん

震災直後の3月末に、親戚を頼って埼玉県所沢市に移動しました。そこで川越市にある総合卸売市場に野菜の詰め込みなどをする仕事を夫婦で得ることができました。仕事があることは本当にありがたいです。ただ、請戸で漁をしていた時は、仕事の時間の管理などはすべて自分でしていたのですが、今度は勝手が違うので慣れるのに苦労しました。埼玉県内の高校に進学した三女が、高校卒業後は短大

に進みたいと言っているのですが、この目標を達成するまではこの土地で暮らして行こうと思っています。でも、都会の暮らしは、やはり合わないですね。窓を開ければ近所迷惑を意識しなければならぬし、何かと気を使うことが多いです。できれば知り合いの多い福島に近いところで暮らしたいと思っ、色々調べています。自分たちのこともありますが、何よりも将来、娘たちが帰ってくることでできる実家は作っておく必要があると考えています。こうして福島から外に出て暮らしてみると浪江での暮らしがどんなに良いものだったかを感じます。新鮮な魚や野菜、おいしいお米など、こちらでは味わえないですね。浪江にいた頃は、魚の切り身の無駄な部分を大胆に捨てていたのですが、随分ともったいないことをしていたのだなあ

と、ふり返っています。浪江では、みんなで力を合わせてまちづくりをする雰囲気もありました。商工会の原田さんとのつながりで、漁師の家5軒ほどが津島小学校の5・6年生を受け入れる民泊の体験事業などもちょうど始まった頃でした。これから盛り上がるというときに震災が来てしまったわけです。あの頃のような暮らしやまちづくりができないことが残念です。役場の方でも町の復興に向けた取り組みを進めているようですが、やっぱり自分たちのこれからは自分で決めていく必要があると思います。役場の動きを待っているのではなく、どこかで踏ん切りをつけることが大切だと思います。震災後、私たちが多くの方に助けられてここまで来ることができました。その御恩に報いるためにも、しっかり家族で力を合わせて生きていくつもりです。



福島県

木幡 瑞秋さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 阿部
取材日：4月10日

未来を信じて前に進みたい、あの日の記憶と共に

現在、木幡さん家族は別々に暮らしていますが、それぞれの土地で元気に生活をしています。

木幡さんは、以前、幾世橋で歯科医院を営んでいましたが、今年2月に福島市矢野目で再開し、忙しい毎日を送っています。

避難先で何もしないで受け身でいることに耐えられなかったこと、家族のことも考え、3月下旬には就職活動を始めました。友人の紹介もあり、秋田県能代での仕事を見つけ、家族を山形へ残し、単身で向かいました。

■あの日は診療中でした
1回目の揺れが収まり外へ出てみると、周りはひどい状況になっていました。揺れが落ち着いたらと患者さんとスタッフには帰宅してもらいました。揺れが収まった直後はまだ電気が通じていたので、情報を得てから北幾世橋の自宅へ戻りました。津波の心配もあり、家族とともに高台へ急ぎました。高台を通って移動し、避難所の幾世橋小学校へ行き、そこで両親とも合流できました。避難所では「原発の3km圏内、10km圏内の避難は」などと原発事故の話が聞こえてきたので、翌日12日には南相馬市の親戚を頼って移動しましたが、その日のお昼には妻の実家がある山形へと向かいました。

避難先で何もしないで受け身でいることに耐えられなかったこと、家族のことも考え、3月下旬には就職活動を始めました。友人の紹介もあり、秋田県能代での仕事を見つけ、家族を山形へ残し、単身で向かいました。

■これからの人生を前向きに
昨年夏に福島に戻り、福島市で歯科医院の再開の準備を始め、ようやく今年2月1日に開業しました。
患者さんたちをはじめ、今まで作り上げてきたものやいろいろなつながりが福島にはたくさんあります。やはり福島に戻るしかないと思いましたが、仮設住宅に近いということもあり、患者さんの多くは浪江の方です。待合室はちよつとした憩いの場になっていくようです。
現在、両親は宇都宮、息子は東京、妻と娘は仙台と、みんなばらばらに生活しています。それぞれの土地で新しい友人を作り、今の生活を充実させていきます。震災がなかったら新しい人との出会いもなかったかもしれません。状況を嘆いて後ろばかりを振り返るのではなく、でも過去のことを忘れるのではなく、前向きに今の状況を捉えて進んでいきます。前へ進んでいくしかないと思っています。



▲こわた歯科医院にて



秋田県

古農りつ子さん(酒井)

取材者：NPO法人あきたパートナーシップ 高杉
取材日：4月6日

「青春の今を生きています」 — 両親の思いも感じながら、 明日に向かって進んでいます —

震災当時、お姉さんが秋田市にいたことから、家族で避難しました。間もなく、今住む一軒家に落ち着くことができ、高校生活が始まりました。秋田の地方紙にもその活躍が取り上げられるほど、部活のスピードスケートでは活躍しています。お料理をすることが趣味の高校3年生です。青春真っ只中の彼女にお話をお聞きしました。



▲お気に入りのスケート靴を持って。

震災直後に来た当初は、秋田にすぐには馴染めなかったのですが、その年の4月から高校1年生として通学を始めることができ、クラスの仲間にも良くしてもらい、仲の良い友だちもできました。
部活はスピードスケート部に入って、頑張っていてインターハイに出て、それから国体にも出場することができました。部活は苦しいこともありましたが、楽しいことがたくさんありました。

2年生までは部活の友だちと一緒に過ごす時間が多かったのですが、大学に進学することを決めたので、これから勉強しなくてはいいませんが、まだ、はっきりした夢が持てなくて「考えなくて」と思っているところ
つい先日、浪江にいた時の中学の部活の友だち7人が福島市に集まり、すごく楽しかったです。何百回に1回とかの地震だったでしょ？それだけでなくて原

発事故もあったから、こういう運命だと思ふけど...。友だちが言うけど「東北の人なら（辛抱強く粘り強いから）乗り越えられる、だから東北の人がこういう試練に遭ったんだ」って。そんなことも浪江の友だちとメールや手紙でやり取りしています。辛いことだけじゃなく、友だちや仲間との絆が一層深まったという実感があ

ます。でも、全国の人には「震災のことを忘れないで」と言いたいです。ボランティアもだんだん減ってきているといいますが、これからでも行ってみたい。私のお前は農家だったので、やはり農業をいつかやりたいと思っているようです。もちろん辛いこともあったと思いますが、自営で浪江の広々とした大地でやってきたのだから、今のサラリーマン生活は大変だと思いません。秋田の冬はやっぱり寒くて辛かったし、浪江がやっぱり懐かしいです。
私はまだはっきりした夢が見つからないと言いましたが、大学は理科系を希望しています。動物や生き物が好きなので、その方面に進むことができると考えています。復興の役に立てれば、直接、浪江や福島の復興にということではないかもしれませんが、何らかの形で社会のために役立てればと、漠然とだけ考えています。



佐藤 三夫さん・桂子さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：4月12日

いつまでも家族一緒に



▲左から桂子さん、三夫さん

佐藤さんご家族は、震災後、福島県内から石川
県へと移動し、現在は妻・桂子さんのお仕事の関
係で、山形県酒田市で暮らしています。母・芳子
さんは足が悪くなったため近くの施設に入居しま
したが、今は元気に暮らしています。

■三夫さん
3月12日が父の7回忌でした
ので、その準備で忙しく過ごし
ていた矢先の地震でした。妻は、
準備のためサンプラザで買い物
をしていましたが、すぐに自宅
の母のそばに帰り、私は双葉町
の職場にいましたので、自宅に
帰れたのは夜でした。朝になり、
避難を知らせる広報車が回って
きましたがよく聞こえず、明る
くなってから、避難の事を知
り、小高にある私の実家に避難
しました。母は寝たきりでした
ので、布団ごとそのまま車に乗
せ身の回りのものをまとめ、す

ぐに戻れるだろうと思家を出
ました。しかし、一晩過ごした
後、小高も原発から30km圏内避
難指示が出て移動せざるをえま
せんでした。
その後、小高から津島、川俣、
二本松など様々な場所を転々と
しました。母は避難所では周り
の方に迷惑をかけるからと、気
を遣い外の車の中で過ごす夜も
ありました。その避難の状況を
知った姪たちが、自分たちが嫁
いだ石川が長野にきたらどうか
と言ってくれ、石川県かほく市
に避難することを決めました。
祖母のことも心配し、ガソリン
を持って新潟のサービスイリア
まで迎えに来てくれ、とてもよ
くしてくれました。
石川県で母が介護認定を受け
ることになりましたが、ケアマ
ネージャーの方にとってもよくし
ていただき、浪江町との連絡や
介護の手続きもスムーズでした。
本当に感謝しています。現在、
母は近くの施設に入居していま
すが、元気に暮らしており安心
しています。

■桂子さん
子どもの頃長く暮らしてきた
幾世橋の小学校から見える風景
を懐かしく思い出しますし、自
宅のあった権現堂順礼川原の隣
組の皆さんも元気でいてくれる
といいなと思います。また、佐
屋前の老人会の皆さんには母が
大変お世話になりました。酒田
市から福島県は遠く町の方と会
えず残念なのですが、町の連絡
帳もできたのでお世話になった
知人や友人とのつながりをこれ
からも大切にしたいと思ってい
ます。
原発から20km圏内にあつた私
の職場が閉鎖となったため、同
社の酒田市の事業所に移籍しな
いかというお話をいただき、
一昨年6月、家族でこちらに暮
らす決心をしました。
震災から2年が経ちましたが、
この2年は本当に早く、はじめ
の4カ月は決心することや決め
なくてはならないことがとても
多く、あつという間に過ぎまし
た。母も移動ばかりの状態では
元気にならないと思いましたが、
これからどうするかを考えてい
るより仕事を優先し生活をする
ことが大切と思いました。酒田
市は冬が厳しく、息子や親戚が
近くにいないので不安なことも
ありますが、まずは母と家族で
一緒に落ち着いて生活がしたい
と思っています。



小野寺みどりさん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：3月23日

子どもの笑顔と夫の頑張り、 そして東北人の絆に支えられて

埼玉県、二本松市での避難生活を経て、
2011年8月から仙台市で暮らしている小野寺
さん。ご主人が経営する会社の経理の仕事をご
なしながら趣味の手芸にも力を入れるなど「落
ち込む暇なく頑張っています」。



▲小野寺さんご一家。左から新次さん・祥汰くん・みどりさん。手作りのスヌード(マフラー)と上履き袋を手に。

■避難に次ぐ避難の2年間
この2年間はあまりにいろん
なことがあり、長いようであつ
という間に過ぎた気がします。
震災が起きたのは、ちょうど
子どもが小学校に入学する年で
した。私たち家族はすぐに都路
の親戚宅に逃げ、そこにも避難
命令が出たので叔父が住む埼玉
県朝霞市へ。
そして1カ月後、主人が南相
馬で仕事を再開することになっ
たため、二本松市の借上げ住宅
に移って避難生活を送りました。
でも、当時の二本松は放射線量

■子どもはサッカーに夢中
もう浪江には戻れないんじや
ないか？新しい環境になじめる
かしら？不安を抱えながらの引つ
越しでしたが、子どもは転校し
てすぐサッカーチームに入団し、
お友だちもたくさんできました。
初めはボールに触ることもでき
なかった子どもが、今日はミニ
ゲームで何点得点を入れたよっ
て楽しそうに話してくれたり、
元気いっぱい校庭を走り回っ
ています。そういう姿を見るの
が嬉しくて、私も少しずつ前向
きになれました。
主人も愚痴ひとつこぼさず頑
張ってくれています。会社が浪
江にあり、たくさんいた従業員
も散り散りになってしまったの
で、震災後はほとんどゼロから
のスタートでした。辛いことも
たくさんあるはずですが、いつ
も笑顔でいてくれる。だから私
も頑張れるんです。

■手芸、そして新しい喜び
最近の私の日常は、子どもが
学校行事を通じて私もお友だ
ちが増えました。浪江出身のお
母さんとも親しくしていますし、
気の合う方が多いのは同じ東北
人だからかもしれません。震災
を経て、かえって絆が深まった
気がします。仙台は私たちの第
2の故郷になりつつありますが、
距離的に離れてしまった浪江の
お友だちとも、いつか会える日
が来ると信じています。どうか
お元気で頑張ってください。

学校に行っている間に主人の会
社の経理の仕事をし、時間があ
ると編み物や縫い物をしたり、
お母さん仲間とランチに出かけ
たりと、それなりに充実した毎
日を過ごしています。
手芸を始めたのは仙台で暮ら
し始めてからです。ミシンを買っ
て子どもが学校で使う袋物を縫っ
たり、マフラーを編んだり。震
災前より仕事が減ったし、1人
でいる時間が増えた分、何かやっ
ていないと落ち着かないとい
うか、時間を無にしたいなかつた
んです。でも始めたら面白く
て、ハマってしまいました。材
料の毛糸や布を探して歩く時間
も楽しいし、甥や姪に手作りの
品をプレゼントするとすごく喜
んでくれるんです。その顔を見
るのが嬉しくて。